

空 蟬

光る源氏十七歳夏の物語

〔第一段 空蟬の物語〕

お寝みになれないままには、「わたしは、このように人に憎まれたこととはないのに、今晚、初めて辛いと男女の仲を知ったので、恥ずかしくて、生きて行けないような気持ちになってしまった」などとおっしゃると、涙まで流して臥している。とてもかわいとお思になる。手触りから、ほっそりした小柄な体つきや、髪のたいして長くはなかつた感じが似通っているのも、気のせいか愛しい。むやみにしつこく探し求めるのも、体裁悪いだろうし、本当に癩に障るとお思いになりながら夜を明か

しては、いつものように側につきまよせおっしやることもない。夜の深いうちにお帰りになるので、この子は、たいそうお気の毒で、つまらないと思う。

女も、大変に気がとがめると思うと、お手紙もまったくない。お懲りになつたのだと思うにつけても、「このまま冷めておやめになつてしまつたら嫌な思ひであろう。強引に困つたお振る舞いが絶えないのも嫌なことであろう。適当なところで、こつしてきりをつけたい」と思つても、の、平静ではなく、物思いがちである。

源氏の君は、氣にくわないとお思ひになる一方で、このままではやめられなくお心にかかり、体裁悪くまでお困りになつて、小君に、「とても辛く、情けなくも思われるので、無理に忘れようとするが、思ひどおりにならず苦しいのだよ。適当な機会を見つけて、逢えるように

手立てせよ」とおっしゃり続けるので、やっぱり思うが、このような事柄でも、お命じになって使ってくださいることは、嬉しく思われるのであった。

〔第二段 源氏、再度、紀伊守邸へ〕

子供心に、どのような機会にと待ち続けていると、紀伊守が任国へ下ったりなどして、女たちがぐつろいでいる夕闇頃の道がはつきりしないのに紛れて、自分の車で、お連れ申し上げる。

この子も子供なので、どうだろうかとご心配になるが、そう悠長にも構えていらっしやれなかつたので、目立たない服装で、門などに鍵がかけられる前にと、急いでいらっしやる。

人目のない方から引き入れて、お降ろし申し上げる。子供なので、宿直人なども特別に気をつかつて機嫌をとらず、安心である。

東の妻戸の側に、お立たせ申し上げて、自分は南の隅の間から、格子を叩いて声を上げて入った。御達は、

「丸見えです」と言っているようだ。

「どうして、こゝ暑いのに、この格子を下ろしておられるの」と尋ねると、
「昼から、西の御方がお渡りあそばして、碁をお打ちあそばしていらつしやいます」と言う。

そうして向かい合っているのを見たい、と思つて、静かに歩を進めて、簾の隙間にお入りになつた。

先程入った格子はまだ閉めてないので、隙間が見えるので、近寄つて西の方を見通しなきると、こちら側の際に立ててある屏風は、端の方が畳まれているうえに、目隠しのはずの几帳なども、暑いからであるうか、うち掛けてあつて、とてもよく覗き見ることができる。

〔第三段 空蟬と軒端萩、碁を打つ〕

灯火が近くに灯してある。母屋の中柱に横向きになつてゐる人が自分の思いを寄せている人かと、まっさきに目をお留めになると、濃い紫の綾の単重襲のようである。何であるうか、その上に着て、頭の恰好は小さく小柄な人で、見栄えのしない姿をしているのだ。顔などは、

向かい合っている人などにも、特に見えないうちに気をつけている。手つきも痩せ痩せした感じで、ひどく袖の中に引き込めているようだ。

もう一人は、東向きなので、すっかり見える。白い羅の単衣に、二藍の小袷のようなものを、しどけなく引掛けて、紅の袴の腰紐を結んでいる際まで胸を露わにして、嗜みのない恰好である。とても色白で美しく、まるまると太って、大柄の背の高い人で、頭の恰好や額の具合は、くつきりとしていて、目もと口もどが、とても愛嬌があり、はなやかな容貌である。髪はとてもふさふさとして、長くはないが、垂れ具合や、肩のところがすつきりとして、どこをとつても悪いところなく、美しい女だ、と見えた。

道理で親がこの上なくかわいがることだろうと、興味をもつて御覧になる。心づかいに、もう少し落ち着いた感じを加えたいものだ、ふと

思われる。才覚がないわけではないらしい。碁を打ち終えて、だめを
押すあたりは、機敏に見えて、陽気に騒ぎ立てると、奥の人は、とて
も静かに落ち着いて、

「お待ちなさいよ。そこは、持でありましょう。このあたりの、劫を先
に数えましょう」などと言うが、

「いやはや、今度は負けてしまいましたわ。隅の所は、どれどれ」と指
を折って、「十、二十、三十、四十」などと数える様子は、伊予の湯桁
もすらすらと数えられそうに見える。少し下品な感じがする。

極端に口を覆って、はつきりとも見せないが、目を凝らしていらつしゃ
ると、自然と横顔も見える。目が少し腫れぼったい感じがして、鼻筋
などもすつきり通ってなく老けた感じで、はなやかなところも見えない。

言い立てて行くと、悪いことばかりになる容貌をとでもよく取り繕つて、傍らの美しきで勝る人よりは嗜みがあるうと、目が引かれるような態度をしている。

朗らかで愛嬌があつて美しいそののを、ますます得意満面に気を許して、笑い声などを上げてはしゃいでいるので、はなやかさが多く見えて、そうした方面ではそれなりにとても美しい人である。軽率であるとお思ひになるが、お堅くないお心には、この女も捨てておけないのであつた。

ご存じの範圍の女性は、くつろいでいる時がなく、取り繕つて横顔を向けたよそゆきの態度ばかりを御覧になるだけだが、このように気を許した女の様子なのぞき見などは、まだなきらなかつたことなので、気づかずにすっかり見られているのは気の毒だが、しばらく御覧にな

りたいとは思いつながらも、小君が出て来そう気がするので、そつとお出になつた。

渡殿の戸口に寄り掛かつていらつしやる。とても恐れ多いと思つて、

「珍しくお客がおりまして、近くにまいれません」

「それでは、今夜も帰そうとするのか。まったくあきれて、ひどいではないか」とおつしやると、

「いいえ決して。あちらに帰りましたら、きっと手立てを致しましょう」と申し上げる。

「そのように何とかできそうな様子なのであろう。子供であるが、物事の事情や、人の気持ちを讀み取れるくらい落ち着いているから」と、お思ひになるのであつた。

碁を打ち終えたのであろうか、衣ずれの音のする感じがして、女房たちが各部屋に下がって行く様子などがするようである。

「若君はどこにいらっしゃるのでしょうか。この御格子は閉めましょう」と言つて、物音を立てさせているのが聞こえる。

「静かになつたようだ。入つて、それでは、うまく工夫せよ」とおっしゃる。

この子も、姉のお気持ちは曲がりそうになく堅物でいるので、話をつけるすべもなく、人少なくなつた時にお入れ申し上げようと思つたのであつた。

「紀伊守の妹も、ここに居るのか。わたしにのぞき見させよ」とおっしゃるが、「どうして、そのようなことができましようか。格子には几帳が添え立ててあります」と申し上げる。

もつともだ、しかしそれでも興味深くお思いになるが、「見てしまつたとは言うまい、気の毒だ」とお思いになって、夜の更けて行くことの遅いことをおっしゃる。

今度は、妻戸を叩いて入って行く。女房たちは皆静かに寝静まっていた。

「この障子の口に、僕は寝ていよう。風よ吹き抜けておくれ」と言つて、畳を広げて横になる。女房たちは、東廂に大勢寝ているのだろう。妻戸を開けた女童もそちらに入つて寝てしまったので、しばらく空寝をして、灯火の明るい方に屏風を広げて、うす暗くなったところに、静かにお入れ申し上げる。

「どうなることか、愚かしいことがあつてはならない」とご心配になると、とても気後れするが、手引するのに従つて、母屋の几帳の帷子を引き

上げて、たいそう静かにお入りになろうとするが、皆寝静まっている夜の、お召物の衣ずれの様子は、柔らかであるのが、かえつてはつきりとわかるのであった。

〔第四段 空蟬逃れ、源氏、軒端萩と契る〕

女は、あれきりお忘れなのを嬉しいと努めて思おうとはするが、不思議な夢のような出来事を、心から忘れられないころなので、ぐっすりと眠ることさえできず、昼間は物思いに耽り、夜は寝覚めがちなので、春ではないが、「木の芽」ならぬ「この目」も、休まる時なく物思いがちなのに、暮を打っていた君は、「今夜は、こちらに」と言つて、今の子らしくおしゃべりして、寝てしまったのだつた。

若い女は、無心にとてもよく眠っているのであらう。このような感じが、とても香り高く匂つて来るので、顔を上げると、単衣の帷子を打ち掛けてある几帳の隙間に、暗いけれども、にじり寄つて来る様子かはつきりとわかる。あきれた気持ちで、何とも分別もつかず、そつと起き出して、生絹の単衣を一枚着て、そつと抜け出したのだつた。

源氏の君はお入りになつて、ただ一人で寝ているのを安心にお思ひになる。床の下の方に二人ほど寝ている。衣を押しやつてお寄り添ひになると、先夜の様子よりは、大柄な感じに思われるが、お気づきなさらない。目を覚まさない様子などが、妙に違つて、だんだんとおわかりになつて、意外なことに癢に思うが、「人違ひをしてまごまごして」と見られるのも愚かしく、変だと思つたろう、目当ての女を探し求めるのも、これほど避ける気持ちがあるようなので、甲斐なく、間

抜けなと思うだろう」とお思いになる。あの美しかった灯影の女ならば、何ということはないとお思いになるのも、けしからぬご思慮の浅薄さと言えようよ。

だんだんと目が覚めて、まことに思いもよらぬあまりのことに、あきれた様子で、特にこれといった思慮があり気の毒に思うような心づかいもない。男女の仲をまだ知らないわりには、ませたところがある方で、消え入るばかりに思い乱れるでもない。自分だとは知らせまいとお思ひになるが、どうしてこういうことになったのかと、後から考えるだろうことも、自分にとつてはどうということはないが、あの薄情な女が、強情に世間体を憚っているのも、やはり気の毒なので、度々の方違えにかこつけてお越しになつたことを、うまくとりつくりつてお話しになる。

よく氣のつく女ならば察しがつくであろうが、まだ経験の浅い分別では、あれほどおませに見えたようでも、そこまでは見抜けない。

憎くはないが、お心惹かれるようなところもない氣がして、やはりあのいまましい女の氣持ちを恨めしいとお思になる。「どこにはい隠れて、愚か者だと思つてゐるのだらう。このように強情な女はめつたにいなものを」とお思になるのも、困つたことに、氣持ちを紛らすこともできず思ひ出さずにはいらつしやれない。この女の、何も氣づかず、初々しい感じもいじらしいので、それでも愛情こまやかに将来をお約束しかせなさる。

「世間に認められた仲よりも、このよくな仲こそ、愛情も勝るものと、昔の人も言つていました。あなたもわたし同様に愛してくださいよ。世間を憚る事情がないわけでもないのです、わが身ながらも思うにまか

すことができなかつたのです。また、あなたのご両親も許されないうらと、今から胸が痛みます。忘れないで待っていて下さいよ」などと、いかにもありきたりにお話しなさる。

「人が何と申しますことかと恥ずかしくて、お手紙を差し上げることもしできないでしょう」と無邪気に言う。

「誰彼となく、他人に知られては困りますが、この小さい殿上童に託して差し上げましょう。何げなく振る舞っていて下さい」

などと言いついて、あの脱ぎ捨てて行つたと思われる薄衣を手にとつてお出になつた。

小君が近くに寝ていたのをお起こしになると、不安に思いながら寝ていたので、すぐに目を覚ました。妻戸を静かに押し開けると、年老いた女房の声で、

「そこにいるのは誰ですか」

と仰々しく尋ねる。厄介に思つて、

「僕です」と答える。

「夜中に、これはまた、どうして外をお歩きなさいますか」

と世話焼き顔で、外へ出て来る。とても腹立たしく、

「何でもありません。ここに出るだけです」

と云つて、源氏の君をお出し申し上げると、暁方に近い月の光が明るく照つているので、ふと人影が見えたので、

「もう一人いらつしやるのは、誰ですか」と尋ねる。

「民部のおもとのようですね。けつこうな背丈ですこと」

と云う。背丈の高い人でいつも笑われている人のことを言うのであつた。老女房は、その人を連れて歩いていたのだと思つて、

「今そのうちに、同じくらしいの背丈におなりになるでしょう」

と言ひ言ひ、自分もこの妻戸から出て来る。困つたが、押し返すこともできず、渡殿の戸口に身を寄せて隠れて立つていらつしやると、この老女房が近寄つて、

「お前様は、今夜は、上に詰めていらつしやったのですか。一昨日からお腹の具合が悪くて、我慢できませんでしたので、下におりていましたが、人少などあると言ってお召しがあつたので、昨夜参上しましたが、やはり我慢ができないようなので」

と苦しがる。返事も聞かないで、

「ああ、お腹が、お腹が。また後で」と言つて通り過ぎて行つたので、ようやくのことでお出になる。やはりこうした忍び歩きは軽率で良くないものだ、ますますお懲りになられたことであろう。

〔第五段 源氏、空蟬の脱ぎ捨てた衣を持って帰る〕

小君を、お車の後ろに乗せて、二条院にお帰りになった。出来事をおっしゃって、「幼稚であつた」と軽蔑なさつて、あの女の気持ちに爪弾きをしいしいお恨みなさる。気の毒で、何とも申し上げられない。

「とてもひどく嫌つておいでのようなので、わが身もすっかり嫌になつてしまった。どうして、逢つて下さらないまでも、親しい返事ぐらひはして下さらないのだろうか。伊予介にも及ばないわが身だ」

などと、氣にくわれないと思つておっしゃる。先程の小袿を、そうは言ふものの、お召物の下に引き入れて、お寝みになつた。小君をお側に寝かせて、いろいろと恨み言をいい、かつまた、優しくお話しなさる。

「おまえは、かわいいけれど、つれない女の弟だと思つと、いつまでもかわいがつてやれるともわからない」

と真面目におつしやるので、とても辛いと思つている。

しばらくの間、横になつていられたが、お眠りになれない。御硯を急に用意させて、わざわざのお手紙ではなく、畳紙に手習いのように思うままに書き流しなさる。

「蟬が殻を脱ぐように、衣を脱ぎ捨てて逃げ去つていったあなたですが、やはり人柄が懐かしく思われます」

とお書きになつたのを、懐に入れて持っていた。あの女もどう思つているだろうかと、気の毒に思うが、いろいろとお思い返しなきて、お言伝てもない。あの薄衣は、小桂のとても懐かしい人の香が染み込んでるので、それをいつもお側近くに置いて見ていらつしやうた。

小君が、あちらに行つたところ、姉君が待ち構えていて、厳しくお叱りになる。

「とんでもないことであつたのに、何とか人目はごまかしても、他人の思惑はどうすることもできないので、ほんとうに困つたこと。まことにこのように幼く浅はかな考えを、また一方でどうお思ひになつていらつしやろうか」

と言つて、お叱りになる。どちらからも叱られて辛く思うが、あの源氏の君の手すきび書きを取り出した。お叱りはしたものの、手に取つて御覧になる。あの脱ぎ捨てた小袷を、どのように、「伊勢をの海人」のように汗臭くはなかつたらうか、と思うのも気が気でなく、いろいろと思ひ乱れて。

西の君も、何とはなく恥ずかしい気持ちがお帰りになった。他に知っている人もいない事なので、一人物思いに耽っていた。小君が行き来するにつけても、胸ばかりが締めつけられるが、お手紙もない。あまりのことだと気づくすべもなく、陽気な性格ながら、何となく悲しい思いをしているようである。

薄情な女も、そのように落ち着いてはいるが、通り一遍とも思えないご様子を、結婚する前のわが身であつたらと、昔に返れるものではないが、堪えることができないので、この懐紙の片端の方に、

「空蟬の羽に置く露が木に隠れて見えないように
わたしもひそかに、涙で袖を濡らしております」